

「生活支援技術－自立に向けた排泄の介護（ICFに基づく）」 の効果的な教授方法

An Effective Teaching Method of Life Support Skills

－ Caring the Excretion for Users' Self – Support Based on ICF –

井口 ひとみ¹ 布施 千草²

介護福祉士の養成教育は、平成21年度から新カリキュラムに改正され、その特徴的なものとして「尊厳を支えるケアの実践」「自立支援」「汎用性ある能力」などがキーワードとしてあげられ、『求められる介護福祉士像』の特徴が明確にされた。新カリキュラム改正に備え、「排泄の介護技術」の旧カリキュラムの現状を整理した後、「生活支援技術－排泄」の授業計画を立案した。今回、立案した「生活支援技術－排泄」を実施した結果を踏まえて、授業計画を検討した。結果、明確になったことを踏まえて授業計画を再検討したものである。今後は、介護職として利用者に行われている排泄介護について関心が持て、その人らしい生活の中での排泄介護が考えられたか、また利用者に行われている排泄介護の状況が適切かどうか考えることができ、日常生活の機能拡大が図れるような具体的な工夫ができたのかを、どのように評価するかということが検討課題として残された。

キーワード：新カリキュラム、尊厳を支えるケア、自立支援、ICFの視点、排泄介護

1. はじめに

介護福祉士の養成教育は、平成21年4月から新カリキュラムに改正されスタートした。今回の改正のキーワードは、「尊厳を支えるケアの実践」「自立支援」「汎用性ある能力」などであり、『求められる介護福祉士像』の特徴が明確にされた。介護福祉士養成課程では、将来像を見据えて学生を教育していくことが求められている。

今回、新カリキュラム「生活支援技術－排泄」を実施した。授業を実施するなかで、旧カリキュラムでは教育内容に入れることができなかつたものが、教授できるようになったのか、また実施した結果から、残された課題は何かなど、新カリキュラムの実施状況を整理し、「自立に向けた排泄の介護（ICFに基づく）」の効果的な教授方法について検討したいと考える。

2. 排泄の介護技術に関する当校の旧カリキュラムの現状

(1) 授業目標

- ①排泄の生理的な機序が理解できる（講義）
- ②おむつ着用の不自由さや不快な状況など相手の立場に立って考えられる。（体験課題）
- ③排尿の障害や排便障害についてとその援助、予防が理解できる（講義）
- ④医療職と連携できる（坐薬・浣腸など）（講義）
- ⑤トイレ、尿器、ポータブルトイレ、おむつの使用方法の基本的な介護の方法が理解できる。（講義と演習）

(2) 授業時間

講義2.5コマ（5時間）、演習1.5コマ（3時間）

1, 2 植草学園短期大学

(3) 教授内容の不足部分として課題となっていたこと

①おむつを着用して生活する人の不自由さや不快な状況を体験することで、相手の立場にたって考えられることを目的として、授業開始時点で課題（おむつを着用しての生活と排泄）を取り入れていた。排泄の介護の導入として位置づけていた。しかし、その体験内容については、学習の広がりや他の人の体験の理解をするためのグループワークができず、個人レベルの体験にとどまっていた。

②医療との連携が必要な坐薬・浣腸などについては、物品を見せての講義であり、演習時間は組み入れていないため、新たにプラスの時間としては計上していなかった。

③旧カリキュラムで学習した学生は、学内で学んだ排泄介護の応用的実践の場の実習で初めて出会う高齢者の排泄介護時に対して、「施設で行われている排泄援助の方法が習得できる」という実技模倣が現状であった。これらを踏まえると、旧カリキュラムの授業計画では、排泄や排泄介護に関する知識は、基本的な技術習得の域を出ていない。つまり、介護職として一人の利用者にとっての排泄を考えた時に、その人らしい排泄とは何かについて、考えられていなかった。

3. 新カリキュラム改正に際し、準備段階で（平成20年度）検討した生活支援技術－排泄の授業計画

(1) 授業目標

- ①上位目標：利用者に行われている排泄介護の状況が適切かどうか考えることができ、日常生活の機能拡大が図れるような具体的な工夫ができる。
- ②中位目標：介護職として利用者に行われている排泄介護について関心が持て、その人らしい生活の中での排泄介護が考えられる。
- ③下位目標：1) 排泄に関する生理的な機序、意義、目的が理解でき、排泄動作の一連の流れを理解できる。
2) 気持ちよい排泄について理解し、工夫する方法について理解

できる。

- 3) 基本的な排泄の介護技術の方法が理解できる。
- 4) ICFの視点にもとづく排泄に関する利用者のアセスメントができる。
- 5) 利用者の現在の排泄の状況が、適切かどうか考えられる。
- 6) 他職種との連携について理解できる。
- 7) 排泄に関する公的制度について理解できる。

(2) 授業時間 講義・演習 30時間

(3) 講義計画（表1）

1	ガイダンス、排泄の意義・目的 高齢者が不自由になった姿でも福祉用具の助けをうけながらその人らしく生き生きと生活している姿を理解できる
2	おむつによる排泄と生活体験（課題）のグループワークと発表（演習、講義）
3,4	気持ちよい排泄の介護（講義）
5,6	排泄の介助の技法（講義）
7	排泄ケア用品についての理解（演習、講義）
8	ICFの視点にもとづくアセスメント（講義）
9,10	その人らしい生活のための、よりよい排泄のケアになっているか。（成功事例を使用して）（講義、演習）
11	排泄に関する公的制度の活用（講義）
12	他職種との連携（講義）
13,14	事例検討（演習、講義）
15	まとめ、テスト

(4) 授業内容で付加できたこと

- ①旧カリキュラムでの課題であったグループワーク（おむつ着用）を入れた。
- ②気持ちよい排泄の介護、排泄ケア用品についての理解、ICFの視点にもとづくアセスメント、成功事例を使用してその人らしい生活のためのよりよい排泄のケアになっているか、排泄に関する公的制度の

理解、事例検討が計画に取り入れることができた。

4. 新カリキュラム開始時の実際のシラバス

「介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて(案)」の内容に影響された状況になってしまった。その結果の授業計画は以下の通りである。

(1) 授業目標

尊厳の保持の観点から、その人に自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出したり、見守ることも含めた排泄の介護技術について理解できる。

(2) 授業計画 (表2)

1	ガイダンス、排泄の意義、目的
2,3	排泄に関する利用者のアセスメント
4,5,6	気持ちよい排泄を支える介護
7,8	安全的確な排泄の介助の技法(トイレ・ポータブルトイレ、採尿器・差し込み便器、おむつ)
9,10	排泄の介護の技法(演習)
11,12	感覚機能、運動機能、認知、知覚機能が低下している人の介助(事例検討)
13	便秘・下痢の予防のための日常生活の留意点、尿回数が多い人、失禁時の介護
14	他職種の役割と協働(坐薬、浣腸、留置カテーテル含む)
15	まとめ、テスト

5. 実施した授業内容

開始と同時に、前述の授業計画で行うと導入が省かれてしまい、後の授業に動機づけができないなど、修正する必要があることに気づいた。進捗状況を見ると、時間割の関係で、「こころとからだのしくみ」、「生活支援技術」(概論としての位置づけの教科)を学ぶ以前に当科目が開始となっていた。また、表2の計画では、排泄に関する「こころとからだのしくみ」の解剖・生理的機序を学ばないうえでの学習に入っていくなど、実行不可能な現状が生じていた。

そこで、シラバスを以下のように修正した。

(1) 修正実施した授業計画

1	ガイダンス、排泄の意義、目的
2	おむつ着用による排泄と生活体験(課題)のグループワークと発表、正常な排泄とできる条件について(課題)
3	排泄に関する利用者のアセスメント
4	排泄の解剖、生理的機序
5,6	気持ちよい排泄をささえる介護、(課題)男性の下着と排泄について、を含む
7	安全的確な排泄の介助の技法(トイレ・ポータブルトイレ、採尿器・差し込み便器、おむつ)
8,9	数種類のおむつの吸水実験と排泄の介護の技法(演習)
10	排泄ケア用品の理解と排泄に関する公的制度の活用
11,12	ICFの視点にもとづくアセスメント、事例検討
13	便秘・下痢の予防のための日常生活の留意点、尿回数が多い人、失禁時の介護
14	他職種の役割と協働(坐薬、浣腸、留置カテーテル含む)
15	まとめ、テスト

修正点については以下の通りである。

①授業2回目に1コマ分をおむつ着用による排泄と生活体験(課題)のグループワークと発表、正常な排泄とできる条件について(課題)を入れた。

②排泄に関する利用者のアセスメントを2コマから1コマにした。

③5,6回目の内容に気持ちよい排泄のために(課題)男性の下着と排泄について入れた。

④8,9回目の演習では、数種類のおむつの吸水実験を入れ、おむつの観察を含んだ。

⑤学生の使用テキストは、「生活支援技術I」メヂカルフレンド社を使用し、参考文献として「中央法規出版のテキスト」、「よくわかる排便、便秘のケア、河井啓三他、中央法規出版、2000」、「自分で治す尿失禁、Richard J. Millard, 診断と治療社1996.」、「福祉用具支援論 自分らしい生活を作るために、財団法人テクノエイド協会、2006」、「ウンココミュニケーションBOOK、辨野義己、ぱる出版、2006」

「心地よい排泄ケア、西村かおる、岩波書店、2008」
「排泄ケアが暮らしを変える－百人百様の老いを支えて、浜田きよ子、ミネルヴァ書房、2008.」等を参考にし、作成した資料を準備して使用した。

(2) 修正実施した結果からわかったこと

①相手の立場にたって考えられることを目的として、おむつを着用した課題後のグループワークを実施することで、各自の体験や他の人の体験から実際のイメージが具体的にになり、おむつ使用の利点、欠点など考えることができる。さらに、グループワークで他の学生の体験を通して、個々により体験が異なることを知り、様々なことを考えるきっかけとなった。おむつによる排泄の不自由さ、一方ではおむつによって安心となること、おむつの尿の吸収状況や漏れから何を予測できるか、排泄後の皮膚や心理面の影響からどのような介護を課題とするか等、気持ちよい排泄の介護に関係していく動機付けができると考える。

②正常な排泄とできる条件とはどのようなことか、例を一部示し各自課題として考えてきた結果を発表し、検討することができた。排泄が正常にできるということを考えることは、その条件が非常に細部に渡っていることや、具体的なことがあるということを理解することになる。これらのことから、利用者の排泄状況と行われている介護がなぜそうなのか、その状況でよいのか考える際の視点になる。

③気持ちよい排泄を支える介護ということで、排泄の個人的因子として生活習慣を考えるにあたり、男性の下着と排泄についての内容を入れることにより女性の学生にはわからない排泄状況の理解を含んだことや、環境の問題や心理的問題など気持ちよい排泄に関連する内容を盛り込むことができた。

④様々な排泄ケア用品の特徴と実際に触れられる種類を増やし試着することで福祉用具としての理解を深めることができた。また、おむつの吸水実験を取り入れることで、吸水量を過信しないことや、当て方・排尿回数によって吸水は実際に異なることや、吸水後のパッドやおむつの状況、時間経過後の状況などが観察を通して理解できることにつながった。

⑤今回使用した事例は、検討を十分できずに使用したために以下の課題が残された。それは、事例の

基本情報が不足している状況のため、学生には不足分は各自が設定してよいことを伝えた。しかし、実習にまだ出ていない時期のため、学生によっては、イメージして情報をプラスすることは困難であったことがあげられる。社会経験や家族で高齢者と暮らした経験がある学生と、そうではない学生では、目標設定、介護内容、また新たな情報収集が必要なことの抽出などに違いがでた。平成20年度作成した、実際に基づいた事例を使用することが必要であった。その人らしい生活のためのより良い排泄のケアになっているか（成功事例を使用して）、これまで教授してきたことを総合的に考えられるような事例により、ICFのアセスメントが展開できるように学習することが必要である。その時期は、排泄に関する基本的な知識・技術を教授したうえで、15回のできるだけ最終回に近いところで事例学習することが望ましいと考える。その人らしい生活のためのよりよい排泄のケアが考えられるには、さまざまな排泄に関する教育内容を実施した後に総合的に学習することが必要である。

⑥学習目標は、学生のあるべき姿を明確化するために、下位目標まで具体的にしておくことが必要である。

⑦「からだところのしくみ」や「生活支援技術」の概論の進度と前後してしまうことが、今後も予測できる。それらを考慮し、解剖・生理的な機序は内容に入れておくことが望ましい。

以上を踏まえて授業計画を再構成した。

6. 再構成した授業計画案

修正の詳細については以下の通りである。

(1) 授業目標

①上位目標：利用者に行われている排泄介護の状況が適切かどうか考えることができ、日常生活の機能拡大が図れるような具体的な工夫ができる。

②中位目標：介護職として利用者に行われている排泄介護について関心を持って、その人らしい生活の中での排泄介護が考えられる。

③下位目標：1) 排泄に関する生理的な機序、意

義、目的が理解でき、排泄動作の一連の流れを理解できる。

- 2) 気持ちよい排泄について理解し、工夫する方法について理解できる。
- 3) 基本的な排泄の介護技術の方法が理解できる。
- 4) ICFの視点にもとづく排泄に関する利用者のアセスメントができる。
- 5) 利用者の現在の排泄の状況が、適切かどうか考えられる。
- 6) 他職種との連携について理解できる。
- 7) 排泄に関する公的制度について理解できる。

(2) 授業計画

1,2	ガイダンス、排泄の意義、目的 排泄の解剖・生理的機序
3	おむつ着用による排泄と生活体験（課題） グループワークと発表、正常な排泄とできる条件について（課題）（講義、演習）
4,5,6	気持ちよい排泄をささえる介護（課題）男性の下着と排泄についてを含む、排泄障害を支える介護（講義、演習）
7	安全で的確な排泄の介助の技法（トイレ・ポータブルトイレ、採尿器・差し込み便器、おむつ）（講義）
8	排泄ケア用品の理解と排泄に関する公的制度の活用（講義）
9,10	数種類のおむつの吸水実験と排泄の介護の技法（演習）
11,12	その人らしい生活のためのよりよい排泄のケアになっているか（成功事例を使用して）（講義、演習）
13,14	他職種の役割と協働（坐薬、浣腸、留置カテーテル含む）（講義、演習）
15	まとめ

7. 結 論

①授業目標は、学生の到達目標の姿が明確になるように設定する。その際には、上・中・下位に具体化する。

②排泄の意義、解剖・生理的機序について授業開始時に教授する。

③相手の立場に立って共感できるよう、おむつ着用による排泄体験を導入にいった後にグループワークをする。

④学生参加型の授業形態を組み込む。

⑤他職種の役割と協働については、1コマ分プラスして2コマにする。

⑥成功事例を検討することでICFのアセスメントについて学ぶ機会とする。15回の授業進行の後半に入れ、総合的に検討できるようにする。

8. 今後の課題

旧カリキュラムのなかでの排泄介護の授業計画では、排泄や排泄介護に関する知識は基本的な技術習得の域を出ていなかったといえる。介護実習では、授業の知識が生かされ活用されていなかった。今回使用した事例では知識を統合するために情報不足が課題となったが、実際に基づいた成功事例を使用した授業展開に焦点を当てることが重要であると再確認した。学生がこれまで学んできた知識技術を統合することで自立支援にもとづきながら考察する機会となる。介護実習と授業の統合を図るために、学生が利用者をイメージすることができるように、学内での事例検討は重要であると考えている。

今後は、介護職として利用者に行われている排泄介護について関心が持て、その人らしい生活の中での排泄介護が考えられる。また、利用者に行われている排泄介護の状況が適切かどうか考えることができ、日常生活の機能拡大が図れるような具体的な工夫ができる。それらを、どのように評価していくかが検討課題として残された。

社会に求められる介護福祉士の役割は、今後も拡大していくものと思わる。したがって、今回の結果もさらに検討しながら、介護福祉士の将来像を見据えて生活支援技術の教育を研究していきたい。

参考文献

- 1) 市川洸ほか、2006、福祉用具支援論 自分らしい生活を作るために、財団法人テクノエイド協会。
- 2) 浜田きよ子、2008、排泄ケアが暮らしを変える－百人百様の老いを支えて、ミネルヴァ書房。
- 3) 西村かおる、2008、患者さんと介護家族のための心地よい排泄ケア、岩波書店。
- 4) 河井啓三ほか、2000、よくわかる排便・便秘のケア、中央法規出版。
- 5) 辨野義己、2006、ウンココミュニケーション、ぱる出版。